

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊 28 年目
創刊 1989 年 Nr. 327

GEKKAN-WIEN 2016年10月号



Vincent van Gogh Der Sämann, 1888 Öl auf Leinwand Kröller-Müller Museum, Otterlo
Albertina "Seurat, Signac, Van Gogh. Wege des Pointillismus"

フィンセント・ファン・ゴッホ 「種まく人」部分 1888年 油彩/カンヴァス 64.2 × 80.3cm クレラー=ミュラー美術館所蔵
アルベルティーナ美術館「スーラ、シニャック、ファン・ゴッホ。点描主義の道」にて2017年1月8日まで展示



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 60



筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エシエント教育院は、グローバルな原子力危機分野において国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的とした修士・博士二貫学位プログラムである。本院の活動の環として、国内外において実習・研修を実施している。今回は、九月に訪問するスイスの地層処分研究施設の前調査として、八月二九・三〇日にかけて、日本原子力研究開発機構（JAEA）幌延深地層研究センター



において研修を実施した。参加学生は金川君、アニーさん、ライピン出身、アイリーンさん（南フリカ出身）、村本君、福田君、フスナさん（マレーシア出身）の計6名。齊藤院長、渡邊さん、筆者の

澤島副所長のご挨拶の後、棚井研究計画調整グループリーダーより、研究内容の説明を受けた。高レベル放射性廃棄物の地層処分に関して、地層科学研究及び地層処分研究開発等を進めている。地下からの調査研究である第1段階、坑道掘削時の調査研究である第2段階を経て、現在は地下施設での調査研究である第3段階を実施中である。地上からの調査による予測を確認し、調査手法や解析評価手法の妥当性を検討する。とともに、処分システムの設計・建設

に関する技術開発を行っている。処分材である緩衝材が水を吸って膨張することにより水が漏れない実験を行うとともに、地下約二五〇メートルの地下試験施設を見学した。学生たちは良い機会に施設を見学して実体験するとともに、専門家から貴重な話を伺うことができた。質疑応答でも数多くの質問をして、放射性廃棄物の地層処分について積極的に学ぶことができたと思

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市を代表する寺院について述べてみたい。ウィーンの寺院と言えば、市のシンボルであるシュテファン大聖堂を挙げることに異存はないと思う。三三九九年に建立され、オーストリアで最も重要なゴシック建築である。高さは約一〇七メートル、幅二四メートル、四つの塔を有し、最も高い三六メートルの南塔からは、ウィーン市街の眺望が楽しめる。屋根には様々な色の瓦でオーストリア・ハプスブルグ帝国の双頭の鷲、ウィーン市とオーストリアの紋章が描かれている。数多くの貴重な祭壇や聖遺物、聖体顕示台などが見られる。また、皇帝フリードリヒ三世を始め歴史上の人物がここに眠っている。モーツァルトの結婚式と葬儀が行われたことでも有名である。

二〇〇〇年に「ウィーン歴史地区」として登録されたユネスコの世界遺産の中核をなす。一方、京都の寺院では金閣寺は別格である



う。正式名称は鹿苑寺であるが、舍利殿「金閣」が有名なため一般的に金閣寺と呼ばれる。臨濟宗相国寺派の寺で、元は鎌倉時代の公卿、西園寺公経の別荘を室町幕府三代將軍の足利義満が譲り受け、三三九七年に山荘北山殿を造ったのが始まりとされる。義満の死後、遺言により寺となり、義満の法号鹿苑院殿から鹿苑寺と名づけられた。舍利殿は室町時代前期の北山文化を代表する建築だったが、昭和五年に放火により焼失し、同二〇年に再建された。同六二年に金箔をそれまでの五倍にし、平成二五年には屋根の茅を張り替えた。一九九六年に「古都京都の文化財」として登録された世界遺産の中核をなす。両市の代表的な寺院はほぼ同時代に建立され、内外から多くの観光客を集めていることが似ている。

余談であるが、筆者がウィーン赴任時に日本からの訪問者をシュテファン大聖堂に何度か案内した。広大で薄暗く厳肅な雰囲気が好きだった。対して金閣寺は、札幌南高校の修学旅行で見学して以来、京大に移籍した二〇二二年に四十四年振りに再訪した。改修後に華麗さを段と増したことに目を瞠った。両市の代表的な寺院を紹介できた幸運に感謝しつつ、シュテファン大聖堂のスケッチを掲載させていただきます。

■杉本純 東工大特任教授 前京大教授 元原子力機構ウィーン事務所長 ■

Wien, Nov. 2016
杉本純